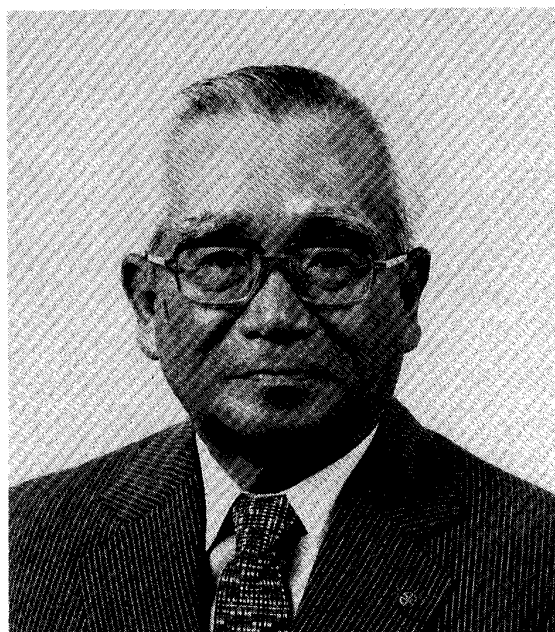


新 名 誉 会 員



岩 村 英 郎 殿
川崎製鉄(株)取締役相談役

氏は、昭和 13 年 3 月東京帝国大学工学部冶金学科卒業後、(株)川崎造船所(川崎製鉄(株)の前身)に入社、川崎製鉄(株)千葉製鉄所製鋼部長、製鉄部長、水島製鉄所製鉄部長、取締役副工場長、常務取締役技術本部長、副社長千葉製鉄所長を経て、昭和 52 年、取締役社長に就任、昭和 57 年に会長に就任の後、昭和 63 年取締役相談役に就任して現在に至っている。この間、わが国および世界の鉄鋼業の進歩・発展に対する氏の貢献は、真に卓越したものであり、その主要な業績は以下に述べるとおりである。

(1)氏は、製鋼部門の技術者および直接の責任者として、大量酸素使用による平炉の生産性の飛躍的向上、純酸素上吹転炉の大型化と同転炉技術の向上、わが国初の純酸素底吹転炉の導入等、大幅な生産性の向上、生産コストの低減を可能にし、わが国鉄鋼業の国際競争力を著しく高めた。

(2)氏は、戦後わが国初の鉄鋼一貫製鉄所である千葉製鉄所の建設、およびその後の同西工場へのリプレース、また、世界最大級の水島製鉄所の建設に尽力し、わが国鉄鋼業の飛躍的發展に大きく貢献した。

(3)氏は、豊かな国際感覚をもち、いち早く海外に目を向け、フィリピンミンダナオ島における焼結工場の建設、ならびにブラジルにおけるツバロン製鉄所の建設を積極的に推進するなど、海外プロジェクトの推進に尽力し、これら諸国との友好関係の促進、技術水準の向上に多大の寄与をなした。

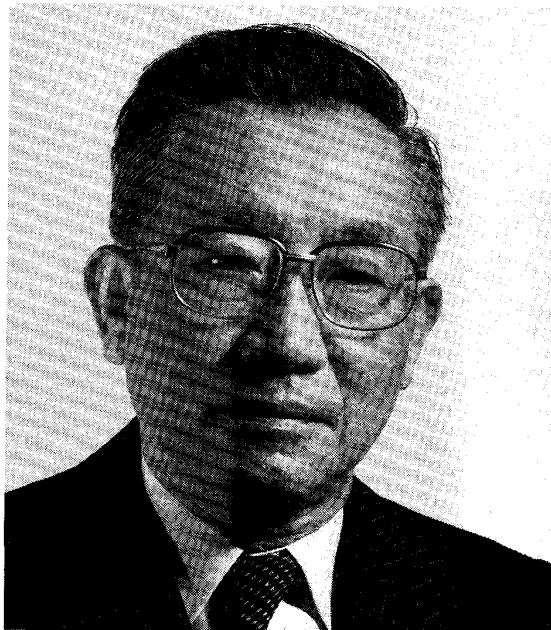
(4)また、氏は、一貫して技術力の向上、事業の合理化、構造変革・多角化に取組み川崎製鉄(株)の確固たる経営基盤をつくりあげた。これは、氏の卓越した識見と指導力によるものであり、其の功績は極めて大なるものがある。

(5)また、氏は、社業に従事するかたわら、産業構造審議会委員、公害健康被害補償協会評議員、中央公害対策審議会委員、新近畿創成懇談会委員等の公職を歴任し、また、(社)日本鉄鋼協会理事、(社)日本鉄鋼連盟副会長、(社)関西経済連合会副会長、(社)経済団体連合会理事および常任理事、(社)経済同友会幹事、(社)兵庫工業会会長等多くの団体の要職を歴任し、その優れた指導力により、わが国鉄鋼業の興隆、経済の発展に多大の貢献をした。

特に、本会事業の推進に当たっては、理事、評議員、共同研究会製鋼部会鑄型分科会主査、鉄鋼技術情報専門委員会委員長、鉄鋼技術情報センター準備委員会委員長を務め、本会発展に大きく貢献した。

以上のような業績によつて、氏は、本会にあつては、昭和 43 年に香村賞、昭和 55 年に渡辺義介賞、昭和 60 年に製鉄功労賞を受賞した。一方、国から、昭和 54 年に藍綬褒賞、昭和 60 年に勲一等瑞宝章を授与されている。

新 名 誉 会 員



塚 本 富 士 夫 殿
日本金属工業(株)代表取締役会長

氏は、昭和 16 年 12 月東京帝国大学工学部冶金学科を卒業後、海軍技術将校を経て日本金属工業(株)に入社、取締役相模原工場長、取締役管理部長、取締役建設部長を歴任、常務取締役、専務取締役を経て、昭和 50 年代表取締役社長、昭和 58 年代表取締役会長に就任し、現在に至っている。

この間、氏は一貫してステンレス鋼の研究、製造技術の開発、改善、品質の向上並びに新鋼種の開発に携り、我が国のステンレス鋼の技術を世界のトップレベルに進歩発展せしめたが、その主要な業績は以下に述べるとおりである。

氏は、ステンレス鋼製造技術のパイオニアとして、常にステンレス鋼の新製造技術の開発に向けて果敢に取り組み、その功績は、湾曲型連铸機の世界初のステンレス鋼への採用、ゼンジミア圧延機への世界初のコンピューター制御の採用、中性塩電解方式の酸洗の採用等多々あるが、中でも AOD 法（アルゴン・酸素脱炭法）の採用とステッセル圧延機の導入は、氏の技術者としての鋭い洞察力を示したものであり、その技術の確立が世界のステンレス鋼業の発展に寄与した功績は偉大である。

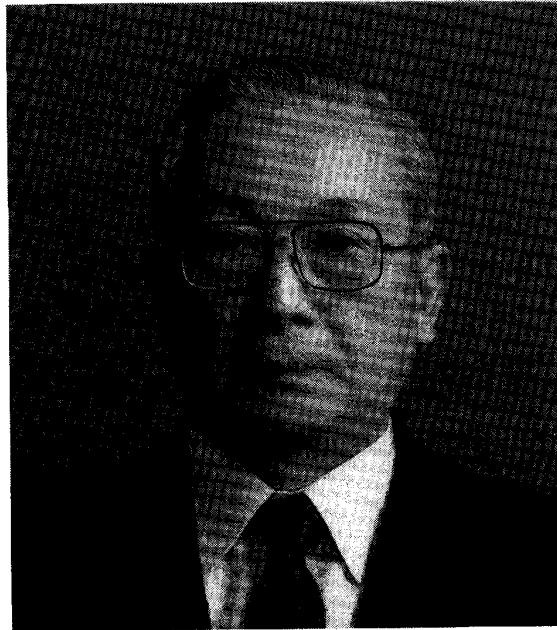
次に、増加するステンレス鋼の需要に応える為、相模原製造所にステンレス鋼の近代的一貫生産体制を確立し、更に、昭和 47 年世界最新鋭の衣浦製造所を建設、これは単に新鋭設備を導入したと言うに止まらず、完全建屋集塵の実施による「無公害工場化」や、当時としては世界に類を見ない「完全連铸化」、そして、独創性溢れる設備レイアウトによる高生産性の実現等の点において、世界的にも高く評価され、その後の世界のステンレス鋼生産工場の模範となつている。

また、氏は、数多くの新鋼種の開発、特に省ニッケル型ステンレス鋼の研究開発を進め、いち早く極低炭素、極低窒素高純度フェライト系ステンレス鋼を開発し量産化に成功した。

このような成果は、海外でも広く認めるところであり、氏は広い国際的視野のもと、西独、米国、スウェーデンのメーカーと技術交流制度を設け、相互に技術力向上を図るとともに、ステンレス鋼製造技術をインド、スウェーデン、英国、イタリア、フィンランド、西独等へ技術指導を行つた。

また、ステンレス鋼専業メーカーとして、日本鉄鋼協会等の主催する国際シンポジウムにも積極的に協力し、学術レベルでの国際交流にも貢献している。氏の本会事業推進への貢献も、評議員として長年にわたつて多大なものがあつた。このような業績によつて、氏は本会にあつては、昭和 54 年に渡辺三郎賞、昭和 60 年に渡辺義介賞を受賞し、更に国家栄典として昭和 55 年に藍綬褒章、昭和 63 年に勲三等瑞宝章を授与されている。

新 名 誉 会 員



久 松 敬 弘 殿

東京大学名誉教授 日新製鋼(株)取締役副社長

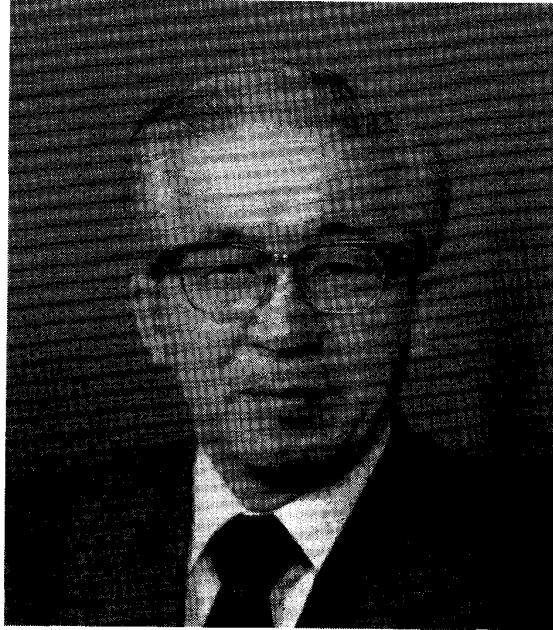
氏は昭和19年9月東京帝国大学第二工学部冶金学科を卒業、昭和22年9月同大学第二工学部講師、昭和24年5月東京大学工学部助教授を経て昭和38年7月教授に昇任した。また昭和55年4月からは工学部長に就任、昭和57年3月定年により退官、東京大学名誉教授の称号を授与され、日新製鋼(株)常勤顧問を経て、昭和62年6月取締役副社長に就任し現在に至っている。

氏は、金属材料学、非鉄冶金学、金属表面工学の広範な分野で多くの独創的な研究を行った。特に鉄鋼材料の耐食性の向上に関する基礎研究は氏の一貫した研究主題の一つであり、多くの先駆的研究成果によりこの方面の学問分野の形成発展に貢献した。(1)鋼の溶融亜鉛めつきに関する基礎研究は戦後いち早く開始し、塩水噴霧試験機の製作、亜鉛クロメート処理皮膜の生成条件及び連続亜鉛めつき浴へのアルミニウム添加技術に対する諸問題を解明した。またこれらの研究成果を背景として長期暴露試験の推進や溶融亜鉛めつき試験方法に関するJIS制定を行った。(2)鋼の腐食とさび層に関する基礎研究では、耐候性鋼の我が国での普及にあわせ耐候性の機構解明に取り組み、人工さびを用いる新しい手法の開発によりさび層の物理化学特性及び合金元素の作用について解明した。(3)ステンレス鋼の局部腐食に関する基礎研究では、オーステナイト系ステンレス鋼の孔食に関し単一食孔の成長挙動を調査、及び微小電極の応用による食孔内の電気化学計測や溶液濃縮の機構を解析し、孔食の現象解明に大きく貢献するとともに孔食電位測定の見直しに至る道を開いた。また隙間腐食に対しては再不動態化電位という新しい指標を提案し局部腐食の定量的普及に貢献した。(4)応力腐食割れおよび腐食疲労に関する基礎研究では、純銅および銅合金の応力腐食割れの生じる条件を明確にし、ステンレス鋼に対しては局部腐食との関連においてその発生挙動をとらえた。

本会事業の推進に当たっては、氏は本会会長を昭和61年4月より63年3月、特定基礎研鋼材の表面物性に関する基礎研究部会長を昭和56年6月より61年2月、基礎共研鉄鋼の応力腐食割れ部会長を昭和50年6月より54年4月まで務めた。現在は亜鉛及び亜鉛合金めつき表面処理鋼板に関する国際会議実行委員長を昭和62年4月より務めているほか評議員としても長年にわたって貢献している。また本会より昭和56年依論文賞、昭和60年西山賞を授与されている。

この他、氏は日本金属学会からは功績賞、2回にわたる論文賞を、日本学術振興会からは腐食防止論文賞、伸銅技術論文賞を、金属表面技術協会からは技術賞を授与されている。また昭和52年には通商産業大臣から工業標準化功労者賞を受け、昭和58年11月には藍綬褒章を授与されている。

新 名 誉 会 員



川 合 保 治 殿

九州大学名誉教授 新日本製鉄(株)顧問

氏は昭和19年9月東北帝国大学工学部金属工学科を卒業、大学院特別研究生を経て、昭和23年6月同大学助教授、選鉱製錬研究所に勤務の後、昭和38年4月九州大学に転任、同大学教授、工学部鉄鋼冶金学科第二講座を担当し、昭和60年3月停年退官、同年4月九州大学名誉教授の称号を授与されるとともに、新日本製鉄株式会社顧問に就任現在に至っている。

氏はこの間、一貫して鉄鋼製錬の反応速度に関する基礎的研究、高温融体の物性に関する研究に従事し、多くの先駆的成果をあげた。(1)反応速度に関する主たる研究は溶鉄—スラグ間の物質移動反応であるS, P, Si, Mn, Cr, Tiなどの溶鉄—スラグ間の移動反応(酸化, 還元反応)速度を測定し、ほとんどの反応は物質移動過程に支配されることを明らかにするとともに、各成分の物質移動係数を求め、スラグ組成の影響は移動の駆動力の変化で説明できることを明らかにした。さらに複数個の成分の移度を伴う同時反応速度の解析に対する指針を与えている。また、造滓材、耐火材であるCaO, MgOあるいはドロマイトのスラグへの溶解速度および濃度分布を測定し、CaOの場合には $2\text{CaO}\cdot\text{SiO}_2$ の生成、MgOの場合にはMgO-FeO固溶体の生成が溶解速度に大きく影響することを明らかにした。(2)鉄鋼製錬反応速度に解析、融体構造の研究にとつて必要な物性測定を行った。すなわち、高炉系スラグの粘度、Sのトレーサー拡散係数、熱伝導率の測定、製鋼系スラグについてCaO-FeO, FeO-MnOの相互拡散係数、表面張力などを測定した。また、熔融鉄合金についても各種成分の拡散係数、粘度、表面張力を測定した。これらの測定値は信頼性の高いものとして、内外の研究者に利用されている。さらに、溶鉄—スラグ間のS, Mn移動反応に伴う界面張力の変化を測定し、界面活性成分の反応速度に対する影響について検討を加えた。

氏は、これらの卓越した業績により、本会から渡辺義介記念賞(昭和42年)、西山記念賞(昭和45年)、西山賞(昭和59年)を授与され、またカナダ探鉱冶金学会から論文賞(1982年)を授与されている。

本会事業の推進に当たっては氏は、昭和44年より理事を5期務め、特に昭和59年4月より2年間副会長を務めた。また西山記念技術講座、鉄鋼工学セミナーの講師、鉄鋼基礎共同研究会の委員、日ソ製鋼物理化学合同シンポジウムの日本代表などを務めて協会事業の推進に尽力し、野呂賞(昭和62年)を授与されている。

また氏は、日本学術振興会第140委員会冶金物質の高温物性の委員長を昭和53年より10年間務め、当該分野の推進に尽力した。委員会活動の成果は、Handbook of Physico-chemical Properties at High Temperaturesとして本会より出版されている。このほか、日本金属学会において功績賞および谷川ハリス賞を授与されている。